

泣け、ペトロ

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 22章 54～62節

「人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座しているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。」

[序] 今日から新年度

今日から、新しい年度に入りました。この年度もご一緒にこの川越教会で礼拝を捧げることが出来ますことを感謝しております。今は丁度教会の暦は、**レントく受難節**に入っています。今日の箇所はイエス様のご受難を思い起こす時、見過ごしには出来ない物語が描かれている場面です。弟子の一人であった**ペトロの大きな挫折の物語**です。しかし、それはまた同時に、新しいペトロが生まれる**救いの物語**と言ってもよいところだと思います。それをご一緒に味わいたく思います。

その前に、先ほど読んで頂いた 54 節以下の前、その伏線となっている大切な箇所がありますので、まずその部分を朗読致します。ルカ 22:31～34 までです。

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい。」するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

ペトロは、果せるかな、この主イエス様が予告されたとおりのことをなしてしまっただけです。それが 54 節以下に記されています。この場面は、私たちの心を揺さぶります。そして、多くの人々はここに、人間の心の弱さを見、ああ、ペトロも人間だった、そして私たちも同じだ、と共感すると思います。そして、イエス様は、

そんな弱い私たちに同情して下さるお方だと捉え、ちょっとホッとすることがあると思います。しかし私は、それは間違っていないと思うのですが、この物語が語ろうとしていることはその程度のものではないのではないか、と思うのです。

[1] ルドルフ・ヘスとアドルフ・アイヒマン

あの悪名高い「アウシュヴィッツ収容所」の所長であったルドルフ・ヘスという人の告白録が翻訳されて出ています。彼はアウシュヴィッツ収容所の建設から、ガスによる大量虐殺の方法などの開発、またその執行の任にあたった当の責任者でした。

しかし、あの「最終解決」という名の下でのホロコースト、ユダヤ人を絶滅しようとした首謀者の一人であるこの人物はどんなに残酷な思考の持ち主であり、性格も破綻している人間かと私たちは思いたいと思います。しかし、事實はむしろ反対でありました。彼はとても宗教的な家庭に育ち、宣教に励んだ親に倣って、自分もアフリカの地などに宣教師になるだろうと思っていたそうです。彼の顔は、写真を見ても恐ろしい顔ではなく、むしろ穏やかな表情をしています。彼は 22 才でナチス党に入党し、やがて親衛隊 (SS) で地位を得ていきました。そして第二次世界大戦下、あのアウシュヴィッツ収容所の所長になり、戦後のニュルンベルク裁判において、250 万人のユダヤ人をガス室に送り込んだことを証言しています。

彼は戦争犯罪人として死刑に処せられる 1947 年に手記を書き残しています。その締めくくりに彼は、「軍人として名誉ある戦死を許された戦友たちが私にはうらやましい。私はそれとは知らず第三帝国の巨大な虐殺機械の一つの歯車にされてしまった。その機械もすでに壊されてエンジンは停止した。だが私はそれと運命を共にせねばならない。世界がそれを望んでいるからだ。」と記し、またこうも書いています。「人々は冷然として私の中に血に飢えた獣、残虐なサディスト、大量虐殺者を見ようとするだろう。大衆にとってアウシュヴィッツ司令官はそのような者としてしか想像されないからだ。彼らは決して理解しないだろう。その男もまた、心を持つ一人の人間だったということ。彼もまた悪人ではなかったということ。」

もう一人、やはりナチス親衛隊で、中佐として、ユダヤ人虐殺の罪で裁かれた、アドルフ・アイヒマンという人がいました。彼も、10 数年後ですが、死刑判決を受けました。その裁判を見届けた有名な政治哲学者のハンナ・アーレントは、「ここには特筆すべき残忍さも、狂気も、ユダヤ人に対するたぎるような憎しみもなく、この何の変哲も無いありふれた人物は、ただ当時のナチス政権の法 (ヒトラーという法) に忠実に従っただけの男」だと言いました。そこにまた、人間というものがかいかに簡単に思考停止し、「凡庸な悪」に支配されやすいかを『エルサレムのアイヒマン』という本で指摘しています。先の、ルドルフ・ヘスにしても、彼はどこにでもいる一人の平凡な人間、律儀で、それなりに善良で、家庭人として妻や子供を愛し、生きることに生真面目なそのような人物であったと言われます。ということは、そ

れはどういうことかという、人間は皆そのようになり得るということです。

このヘスの告白録を訳された思想評論家の片岡啓治氏は、これは私たち全ての者に対する警告であるということを次のように語っています。

「一人の人間が自らの信念にしたがって生きて行った時、それがどれほどの悲惨に繋がり得るかを明らかに語っている」と。——私はこの片岡氏の文章に、今日の聖書の中のペトロのことを思い起こさないではいられませんでした。

[2] 激しく泣いたペトロ

ペトロとは、イエス様がつけたあだ名です。「岩」「巖」と言った意味です。それは、「あなたこそ生ける神の子キリストです」と告白したそのことに対して、イエス様があなたは、ペトロ＝岩＝だ、わたしはその信仰告白の上に私の教会を建てる、と仰ったことに由来しています。しかし、ペトロ自身は揺れ動く存在でありました。そんなことはイエス様は百も承知だったのです。しかし、「信仰」というものは思い違いをしやすいのです。私たちは「信念」と「信仰」を履き違えやすい者です。「信念」とは、ひと言で言えば、「自分の決意」で人生を切り開こうとすることです。それに対して、「信仰」とは、自分でハンドルを握らないこと、神様に自分自身を明け渡すことです。

「自らの信念にしたがって生きて行った時、それがどれほどの悲惨に繋がり得るか」という言葉の通りのことを、ペトロは、そしてまた、他の弟子たちも実は体験したのです。マルコ福音書の14章31節では、「あなたのことを知らないなどとは決して申しません」とペトロが豪語した後、「他の者も同じように言った」と書いてありますから、基本的に、12弟子は同じなのです。

しかし、この物語で、ペトロは「主を知らない」と三度も否定し、その後「激しく泣いた」と書いてあります。ペトロにとっては思わぬ挫折の出来事ですが、私は、このペトロが泣いたと言うことが、ペトロを生き返らされた、いえ、更に言うと、ペトロを本当の意味でペトロにした。＜信念＞で突っ走るのではなく、キリストに捕えられる＜信仰＞に生きる者へと変えてくれたことなのではないか、と思うのです。

今日の22章を少し丁寧に見てみますと、ペトロが、次第に追い詰められ、自分が保てなくなっていくその過程が実に詳細に描かれていることかと思えます。もう一度目で聖書を見てみて下さい。54節以下です。

「人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座しているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。しかし、ペトロはそれを打ち消

して、「わたしはあの人を知らない」と言った。少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。」

56 節で一人の祭司に仕える女中でしょう、その者から「あなたもイエスと一緒にいたでしょう」と言われて否定し、58 節で、他の人が「あなたもイエスの仲間だろう」と指摘されて否定しました。それでもまだペトロは、大祭司の屋敷の中庭に留まっています。夜更けに火に当たりながらさらに一時間ほどいたと言います。そうしましたら、59 節、もう一人の者がペトロに言いました。「一緒だっただろう？ お前のガリラヤ訛りで分かるぞ」。もう三人目です。けれどもペトロはやはり「あなたのいうことは分からない」と言い切ってしまいました。これは、自分の口で救い主との関係を抹消してしまうこと、誓ってしまうことでありました。

ペトロは、なぜ自分がこんなことを言ってしまったのか、自分でも分らなかったのではないのでしょうか？ 美化することのない、剥き出しの描写です。ペトロは恐らくこの瞬間は心が凍り付いていたのではないかと思います。しかし、その時です。鶏が鳴き、ペトロはイエス様が前に自分に語っておられた言葉を思い起こしたのです。「あなたはわたしのことを三度否定するだろう」と。

ペトロは「ああっ！」と思ったと思います。「**そうか、イエス様は何もかもお見通しだったのだ。**私は、私がイエス様を信じ、イエス様に従い、イエス様のためにならどこまでも自分を捨てて付いて行けると思っていた。そしてそんな自分を認めてもらいたいと思っていた。弟子の中でも評価されてしかるべきだと思っていたと思っていた。それが今はこのざまだ、自分は何と傲慢だったのか！」と彼は思ったのだと私は思うのです。

そして、**彼はそこで泣けたのです。激しく泣いた。**12 弟子の中で涙を流した弟子は、彼以外書かれていないのではないのでしょうか？ 泣けて良かったと思います。涙とは、正直です。心が溢れて、タガが外れ、素直になれないと私たちは泣けません。それは理性を超えたもの、神様からの贈り物だと思います。もしもこの時、彼の心が硬いままでいたら、キリスト教会は存在していたのでしょうか？ そんなことも考えてしまうほど、彼が外に出てとめどなく泣いた。それが出来たことは大きいのです。

[3] 主イエスの目が、私たちを捉えている

主イエス様は、弟子たちのことを知り尽くされています。その性格も気質も傾向も皆ご存知で、そして弟子は一人ではなく、12 弟子です。ダイバーシティ、多様な存在を、主は御業のためにお用いになるお方です。にも拘らず、弟子たちの根本的な問題とは何だったかという、「誰が一番偉いのか」という、言ってみれば、出世争いです。今日の箇所ですぐ前の最後の晩餐の席でそのような議論が出たと書いてあります。サラリと書いてありますが、これは実は結構深刻な問題だと思います。

先ほどのルドルフ・ヘスやアイヒマンも、いかに権力ある存在に認めてもらえるかが、生き方の第一義になっていたのです。それは盲目になってただ当時の法(つまりヒトラー)に忠実に従うことを意味していました。結果、何百万人というユダヤ人を、何ら表情を変えずにガス室に送り込み、泣く心などいつしか失っていました。心が凍るということは恐いことです。それを柔らかくすることが出来るもの、それは何でしょうか？ 一つは主イエスの言葉です。それを虚心坦懐に、自分への言葉として聞くことです。そして、もうひとつ、このルカ福音書が書いてくれていること。それは、主イエスの目が、私たちを捉えて離さないということ、それを信じることです。

ペトロが、今正にこれまで自力で頑張ってきた信念に立った生き方がガラガラと崩れ落ちるその「ペトロ崩壊」の場面を、イエス様はちゃんとご覧になっていたのです。それはもちろん、ペトロを責める眼差しではありません。そんな筈はありません。何故ならば、イエス様は既に 31~32 節で仰っているからです！

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。」

あなたは、サタンのふるいにかけられるよ。信仰者というのは、神の御手の中にある者だから、サタンは引き離そうと躍起になるのだ。けれど、大丈夫だ。わたしがあなたのことをいつも覚えて祈っているから。どんな誘惑の中にあっても、わたしがあなたに代わって戦うから大丈夫だ、あなたは、私の勝利のもとに居ればよい、そのように仰っているのです。

そして事実、イエス様は、どんな存在よりも激しいサタンの誘惑をこの場面のすぐ後で体験されたことが分かります。39 節以下、「オリーブ山で祈る」と記されているところです。ゲツセマネの祈りのことです。イエス様は、ご自分の父なる神様との「格闘」をされたのです。私たち全ての者の身代わりとなって十字架の死を経験するという神様の御旨を、汗が血の滴りのように落ちる祈りの格闘の末、ついに「わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」と選び取られたのです。ペトロが追い込まれ、自らが崩壊して泣いた、その直前に、何と神の子である主イエスが、神様によって追い込まれ、しかし、私たちを捨てないために、自ら十字架への道を引き受けられたという、その私たちに対する「救い」がここで決定付けられた出来事がここで起こっていることを見逃すことは出来ません。

[結] ペトロの立ち直りは、教会の立ち直り

ペトロは、イエス様に言われました。「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

イエス様は、ここで「兄弟たち」と言っておられます。私は今回発見したのですけれども、ペトロの挫折と立ち直りは、ペトロ個人の事柄を超えて、共同体、つまり教会の立ち直りなのです。そこを、初めからイエス様は視野に入れて、ペトロを導かれているのだと思います。イエス様、すごいです。私たち一人ひとりの存在が、キリストの体全体を形作る欠かせない存在なのですね。教会は悔い改めの共同体です。それは聖霊の息吹によって、常に新しく形作られていく、生きた共同体です。そして、私たち一人ひとりの人生も、それぞれの個性を良くご存知のイエス様が、時には辛い所も通されることがあると思いますけれども、既にサタンに勝利された方、十字架と復活の主として、いつも、どんな時もその眼差しを注いで下さるのです。主は生きておられるからです！

私たち、自分の力では立てなくなる出来事を、をこれからも何度でも経験することだと思えます。それでいいのだと思えます。私たちには、「帰って行く場所」、「泣き場所」が用意されているのです。慈しみ深い主の眼差しを信じて、聖霊によって、心を柔らかくして頂きましょう。私は、まだまだ固い自分自身を見ます。そしてどうぞお互い、時には心を休め、慌てないで、神様が備えて下さる時、立ち直りの時を待つことも致しましょう。毎週の礼拝で、温かいイエス様の眼差しをご一緒に感じ取って行けたらいいなあ、と思えます。

「そしてあなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

お祈りをお捧げ致します。